大田南畝（蜀山人）と日蓮信仰

木村中一

一、はじめに

日本近世を代表する、特に天明期に活躍した狂歌師・文人として名高い大田南畝（一七四九～一八二三、以下「南畝」）は、二〇二三年に「没後二〇〇年」をむかえて、現在脚光を浴びている。文人として広い交友関係をもつ南畝は「杏花園」などの号の他に狂詩、狂歌の号としての「寝惚先生（念法華先生とも）」[1]、戯作者としての「山手馬鹿人」や「蜀山人」「巴人亭」「四方赤良」などと様々な「号」を用いて活躍した。幼くして多賀谷常安や内山椿軒などから和漢学を学び、後述するが、代々幕府の御徒を勤める家柄から、自らも明和二年（一七六五）七月、御徒頭京極左門配下の御徒としてお抱え入りもしている。明和四年（一七六七）九月には、狂詩文集である『寝惚先生文集』を刊行し、これより戯作文学者として活躍するようになると、天明期の狂歌流行の旗頭の一人として名を馳せるようになるのであった。[2] また寛政の改革によって一時、狂歌や戯作から離れるものの、「能吏」として勤めていた時に作った漢詩作品なども多く伝わり、文人として南畝の作品や影響は、永く後世に語り継がれるものである。

先にも述べたが、二〇二三年は「大田南畝記念の年」ということもあり、多くの南畝関係の特別展が開催され、その生涯や作品に迫る書物が出版されている。しかしその多くが南畝の狂歌師との活動や幕臣としての人物像にスポットをあてるものであって、つまり南畝の信仰に焦点をあてた論考は管見の限り、玉林晴朗『蜀山人の研究』などと数少ない。今回、スポットが当りづらい南畝の信仰、特にその醸成の発露についてを、家族の信仰やその交友関係などから探るものである。

二、大田南畝の生涯

ではまず、簡単に南畝の生涯について、玉林晴朗『蜀山人の研究』や浜田義一郎『大田南畝』、また小池正胤『反骨者 大田南畝と山東京伝』や小林ふみ子『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』などから概観してみたい。[3]

南畝は江戸牛込仲御徒町[4]にて、幕府の御徒を勤めていた父・正智と母・利世の間に四人兄弟の三番目として生まれたと伝わる。上二人は姉であり、大田家の跡取り[5]として絶大な期待があったからか、教育熱心な母[6]の元で幼くして就学し、多賀谷常安や内山椿軒、松崎観海などから和漢学を修学するのであった。秀才であった南畝は同門内から一目置かれる存在となるのに、そう時間はかからなかったという。

明和二年（一七六五）七月六日に、御徒頭であった京極左衛門の配下、御徒の一人として「お抱え入り」を果たし、約三年間ではあるが父と同時に同じ「職（御徒）」を勤めた。一方では明和四年（一七六七）九月に狂詩文集である『寝惚先生文集』を刊行して、狂歌や戯作流行の立役者の一人となっていくのである。明和八年（一七七一）、南畝は富原氏の末娘である「里与」と結婚する。南畝二十三歳、里与十七歳であった。この頃には貧しいながらも南畝の名は文人として世に知れ渡っており、様々な文人たちとの邂逅を果たす。このような繋がりからか、安永三年（一七七四）二月四日には牛込恵光寺[7]（現在の日蓮宗瑞光寺）にて開催された「宝合わせ[8]」に南畝は塙保己一などとともに参加している[9]。

天明五年（一七八五）十一月のこと、吉原松葉屋の新造である三保崎（三穂崎とも）と出会う。この出会いによって南畝は吉原に通い詰め、翌六年（一七八六）七月十五日には三保崎を身請けするのであった[10]。三保崎に「お賤[11]」という名を与え寵愛する南畝であったが、お賤も次第に病みがちとなり、寛政五年（一七九三）六月十九日には加療していた浄栄寺[12]にて没してしまう。

その後、天明七年（一七八七）寛政の改革（松平定信による）を機に一時は狂歌や戯作から遠ざかることとなる。これは松平定信などによって横領が発覚し斬首された土山宗次郎孝之と南畝の親交、また何者かによる南畝への讒言などから「連座」を恐れたためとも、さらに通俗化し新鮮味をなくした狂歌へ南畝の愛想づかしとも指摘されている[13]が、これにより南畝は小禄の御徒として勤めながら、青年達に詩歌などを教える生活を送るのであった。世相慌ただしい中、天明八年（一七八八）九月九日に父・正智が没する、七十三歳ことであった。正智は南畝と共に御徒を勤めていたが、明和五年（一七六八）二月に隠居し、安永三年（一七七四）二月には自ら「自得」と号した。信仰熱心であった南畝の両親については後述することとする。

寛政四年（一七九二）、四十六歳となった南畝は能吏登用試験「学問吟味登科済」が幕府によって創設されたのを機に、寛政六年（一七九四）[14]にこれを受験し御目見得以下の甲科及第首席合格となるが[15]、寛政八年（一七九六）九月六日に母・利世が没してしまう。同年十一月二日には「支配勘定」に任ぜられ、高禄となり家計も次第に楽となるが、生活が苦しい中でやりくりをして育ててくれた七十三歳の母の死を南畝はどのように受け止めたであろう。母に対して「やっと楽に生活できる」この姿を見せられなかったという思いは、南畝の心に影を落としたに違いない。しかし南畝の悲しみはそればかりではない。寛政十年（一七九八）三月十一日には妻の里与が没してしまうのである、四

十四歳であった。貧しい生活に耐えながら息子娘を育てて、南畝の妾の存在にも文句も言わなかった温厚な妻の死も、母の死同様に南畝にとって大きな悲しみであったであろう。この頃、娘[16]（お幸）は既に嫁しており、大田家は南畝と息子（定吉）の二人家庭となってしまうのである。

死別の悲しみとは裏腹に、南畝は幕閣内でメキメキと頭角をあらわすようになる。享和元年（一八〇一）には大阪銅座に赴任することとなり、この頃から中国で銅をあらわす「蜀山居士」より「蜀山人」の号を使用するのである。すでに大阪でも有名人であった南畝は多く文化人と交流し、詩歌を請われることが多かったが「杏花園」の号は狂歌を連想させるので使用したくはなかったようだ。[17] この頃を境として南畝は狂歌などを再開するようになったという。[18]

その後、南畝は江戸の支配勘定に戻るが、文化元年（一八〇四）六月十八日に[19]長崎奉行所詰「支配勘定方」を命じられ、八月末には大阪を発って長崎奉行所へ赴任する。[20] 五十六歳のことであった。主な役目は積み荷の調査で「積荷役人」であったというが、長崎でも南畝の名は知れ渡っており、ここでも多くの人びとが南畝の詩歌を請うたという。[21] 当時、オランダやロシアからの船が長崎に入港し、開港を求めるなどしたために、長崎奉行所は大変忙しかったが、南畝は多忙な日々を送る傍ら、多くの史蹟を廻ったようで、その足跡を記す作品などが散見される。[22]

文化二年（一八〇五）八月には交代が命じられ、十月十日に知友に見送られ長崎を出発。十一月十九日には無事江戸へと到着している。[23] 江戸へと帰還した南畝は文人として、また能吏としての生活を送り、文化五年（一八〇八）十二月には命を受け玉川治水視察などを行った。この治水視察は度々行われて、南畝はその出張費を工面して書庫修理を成したりもしている。文化十二年（一八一五）、南畝は「番付騒動」に巻き込まれる。この番付は当時の文人墨客らのランキングであり、南畝は中央の「行事」の位置に配されていた。南畝はこの中でも高齢、また作品の評価を受けての「行事」という位置であったが、ランキングに不満を持つ一部の者の自ら位置への感情が、「行事」の位置にある南畝への不満へ変化していき、結果として南畝に対し抗議を行うという事となった。この一件は、南畝の「文人墨客の権威」としての地位を明確に見られる事件であるといえる。[24]

忙しく動き回る南畝であったが、文政元年（一八一八）古稀を迎えると躓いて転んだり吐血するなど、次第と身体に不調を来すことが多くなる。文人として活躍はするものの、文政五年（一八二二）までの間には、物見遊山に出発したりしながらも、転倒や病臥に伏す記事を絶え間なく見ることができる。[25] この頃の南畝の体調は快方と悪化を繰り返していたようだ。そして遂に文政六年（一八二三）四月六日、享年七十五歳をもって南畝は逝去した。死因については浜田義一郎『大田南畝』[26]によると、判然としないが脳溢血であろうとされる。南畝の法号は「杏花院心逸日休居士」とされるが、南畝の墓石には「南畝大田先生之墓」[27]とあるのみで、墓碑銘も法号さえも刻まれてはいない。

三、大田家の日蓮信仰

大田家は先祖代々の法華・日蓮信仰を持ち、南畝も先祖以来の信仰を大切にしたようである。しかし南畝の作品には法華・日蓮信仰に係るもののみならず、広く日本仏教各宗派に関するものが多く、これらより南畝は深い日本仏教への関心を持ちつつ、特に先祖の信仰に関する作品には、管見ながら法華・日蓮信仰を多く描かれているように看取できる。この点は『調布日記』などに見え、一例を挙げれば文化六年（一八〇九）二月九日、父・正智の月命日に観乗寺（現在の東京都大田区東六郷）に祖師像の開帳を申し出ており、尊像拝見の様子を先の書に、

いづくの老婆にや、来りあはせて拝するをみるにも、十あまり四とせさきにうせ給ひし母君の事思ひ出さる。吾祖父〈道寿／君〉父君〈自得／君〉ともに法華経に帰依し給ひ、且此祖師の示現し給ふ天明八年は、わが父君のなくなり給へる年なれば、あさましと思ひて、祖考及考妣の法号忌日をも詞書の奥に書のせ置しなり。あまたたびぬかづく心のうちに、頻に父母いませしむかしを思ひ出て、旅衣の袖をうるほしぬ。[28]

と記していることからもそれを伺える。ここに祖父母や父母の信仰を振り返り、在りし日の姿を思い浮かべる南畝の心持ちも知ることができ、この点について『日蓮宗事典』にも「ことに彼の場合宗旨への関心は父母への追慕の念と結びついていた」[29]とある。父・正智と母・利世の篤信は南畝の種々の作品にみられ、南畝の信仰は『日蓮宗事典』にあるように、まさしく先祖や父母に対する「敬慕・追慕の念」にあるといえよう。ここでは大田家の信仰について、南畝の記述を中心にして詳しく考察してみたい。

南畝は『改元紀行』において貫名山妙日寺に赴いた時の様子を、

むかしは此地を王野河原といひしとなん。わが父母の世にいませし時、法華経の御名を唱ふる事のみ枕ことにし給ひしが、けふはからずも祖師の父君の御墓にまうづる事よ。[30]

と記しており、南畝の父母が熱心な法華・日蓮信仰者であったことを述べている。『改元紀行』の、この内容については後述する『高祖累歳録』・『本化高祖紀年録』「序」の、

わがたらちお自得翁いまそかりし時ほくえきゃうのミなを唱ふる事をのミまくらごととし[31]

とも軌を一にすることからも、南畝も父母の「信仰の後ろ姿」を具に見ていたのであろうことが推察できる。南畝は日蓮教団寺院に詣でること数多であり、それを話題として、随筆や紀行文には日蓮聖人や由緒霊跡、さらには各寺院の来歴や高僧の逸話に及ぶものが散見される。[32]

南畝の父母の信仰について詳述すると、父・正智は先にも述べたとおり、明和五年（一七六八）二月に隠居し、安永三年（一七七四）には自ら「自得」と号した。父もまた大田家の信仰熱心を受け継いではいたが、この隠居を契機としてさらに深く法華・日蓮信仰に入ったよ

大田南畝墓石〈右〉、大田自得（大田正智）墓石〈左〉共に東京都文京区白山・本念寺

大田自得（正智）墓碑銘

うで、妻である利世もこれに従ったようだ。しかし両名とも法華経読誦は行なわず、もっぱら題目「南無妙法蓮華経」を唱えることを旨としたようで、[33]この点については大田家墓所がある菩提寺・本念寺にある正智の墓石にも「而不讀經　唯觀誦法華經題」[34]とあることからも明白である。元々、正智は実直な性格であり、温和で人情に篤い人物であった。また江戸内外の日蓮系寺院に赴いては参詣し、寺の住職と談笑するのが好きであったとある。[35]正智は天明八年（一七八八）九月九日に行年七十三をもって逝去した。法号は「自得院道理日悟居士」というが、墓石には「大田自得翁之墓」とのみ刻まれており、[36]墓は現在、大田家菩提寺の本念寺墓所に大田南畝の墓の隣にある。

次に、南畝の母・利世についてみてみたい。利世は十八歳の時に正智の妻として大田家に嫁ぎ、二男二女に恵まれた。「覃幼就學塾師　先妣有以相之也」と利世の墓碑にあるように、また先にも述べたように非常に教育熱心な母であったようだ。[37]「御徒」という小禄の大田家にあって質素倹約に努め、非常にやりくり上手の「良妻賢母」であったといわれる。利世も正智と同様に信仰熱心で、墓碑銘に「喜誦法華經題」とあるように、常に夫の横で題目を唱えていたという。

南畝の母への思いは多くの作品に見え、『七々集』には、

母の忌日に

たらちねのちちをたらふくのみしより六十七の年もへにけり[38]

とあり、多くの作品などにも母への思いが見られる。また母の忌日に菩提寺の本念寺を詣でた事が記されているものもあり、それらから苦労しながらも自らを養育してくれた母への追慕の念をみることができる。しかしこれは決して母だけに限ったことではない。同書には、

九月六日は母の忌日、九日は父の忌日なれば

信行院妙理日得大姉墓石（大田利世・右）晴雲院妙閑信女墓石（お賤・左）共に東京都文京区白山・本念寺

信行院妙理日得大姉（大田利世）墓碑銘

山くづれ海かれいしをわすれめやその長月のむゆかここのか[39]

と父母への思いが詠まれており、父母の忌日に両名の「在りし日の姿」を思い返している。

先祖から続く信仰を踏襲して供養を欠かさない南畝の姿は、

九月六日は母の忌日、八日は祖父、九日は父の忌日なり

かぞいろのなくなりしよりしら菊の花にもそそぐわが涙かな

ねがはくは九月十日にわれしなん祖父ちちわれと三世のみほとけ[40]

と『放歌集』にみられ、文化八年（一八一一）に詠んだこの歌には、祖父・父・母が共に九月に逝去しており、六日（母）八日（祖父）九日（父）と没日も近しく、自らが九月十日に死ぬことが叶うならば大田家男系三代の忌日が並ぶこととなり、南畝自身も強くそれ望むのであった。[41] これこそ連綿と続く大田家の信仰を基として、南畝に醸成された信仰と「先祖敬慕の念」の一端ではないだろうか。

四、大田南畝の日蓮信仰

南畝は深見要言が著わした日蓮聖人伝記物である『高祖累歳録』・『本化高祖紀年録』に共に「序」と、挿絵の「詞書」を寄せている。この両書は日蓮聖人の生涯を著わしたもので、作者である深見要言は近世を代表する在家日蓮信奉者であった。しかしその生涯については不明な点が多く、現在深見要言の人物像を紐解くには、南畝が記した「序」に依るところが多い。[42] また深見要言の生涯や信仰などを南畝が詳細に記していることから両者の深い関係性を見ることができる。影山堯雄氏は「高祖累歳録翻刻解説」において、『高祖累歳録』の挿絵を近世を代表する名画家が多く寄せているのは、文人として名を馳せた南畝や

山本北山などの声援にあづかるところが少なくないとし、大田・山本両名と深見要言とは「同信のよしみ」から緊密に結ばれた関係であることも想像するにかたくないと指摘している。[43] また影山氏はその著書『日蓮宗教団史概説』において「太田蜀山人が師事した玉沢の境智日淳」と記し、南畝が玉沢妙法華寺第三十二世境智院日淳にあてた年賀状を根拠として、日淳が南畝の信仰醸成に一役買っていたことを指摘している。[44] つまり南畝は両親の信仰に対する「後ろ姿」を見、その影響をうけるだけでなく、自らも進んでその信仰へと深く踏み込んでいたようだ。その証左が種々存在する。ここではその一端を考察してみたい。

まず、先の『高祖累歳録』・『本化高祖紀年録』の「序」に注目してみたい。

〈『高祖累歳録』序〉[45]

序

深見要言ハ奥州菊田郡名古曾乃関九面の邑の人なり名ハ徳一の字ハ至厚はじめ密乗を奉ぜしが眼を患ふる事五年風光と生をへだてなん事を**かなしミ**当宗の祖師ならびに七面の神に十年の願をおこしたのめる甲斐の身延山にまうづる事あまたたび**二十年**の間に**二十五度**となんその病すミやかに愈る事を得て後その恩にむくひ徳を謝し奉らんと人々にすすめて法華十六萬部の経題を課誦せしむ又百**万**部の願を発して己に**六十万部**を／得たり外に**自唱の**題目五千部佛像を刻む事五體寺々に納むる所の経題乃本尊百幅／法華経**二十**余部また紫幕十二張を製**つ**て／みのぶ山にかか**げ**紺紙金泥の法華経を／七面の山に納むこたび／祖師一代の行状をしるして本化末法の有縁をちなむその事ハ註画讃よりもくはしく其画**ハ**／山海圖にもこえたりよむにやすくミるにあかず／人をして随喜の心を生ぜしむよりて**思ふ**わが／たらちお自得翁いまそかりし時ほくえきゃうの／ミなを唱ふる事をのミまくらごととし給ひし／がとみに悽愴の思ひに堪ずいささか鄙俚のことばをのぶる事しかり

藤原覃誌

〈『本化高祖紀年録』序〉[46]

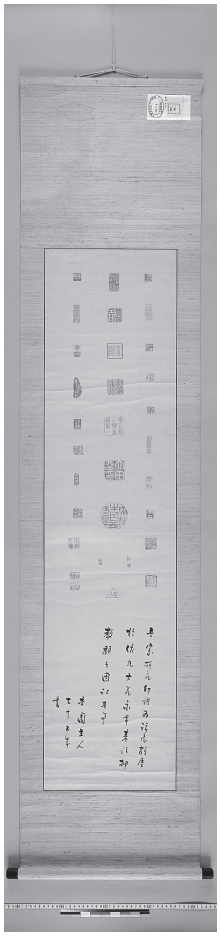
序

深見要言ハ奥州菊田郡名古曾乃関／九面の邑の人なり名ハ徳一の字ハ至厚／はじめ密乗を奉ぜしが眼を患ふる事／五年風光と生をへだてなん事を**悲しミ**／当宗の／祖師ならびに七面の神に十年の願を／おこしたのめる甲斐の身延山にまうづる／事あまたたび**二十三年**の間に**三十度**と／なんその病すミやかに愈る事を得て／後その恩にむくひ徳を謝し奉らんと／人々にすすめて法華十六**萬**部の経題を／課誦せしむ又百萬部の願を発して己に／**歳ずる事を**得たり外に**自読乃**題目五千部佛像を刻む事五體寺々に納むる／所の経題乃本尊百幅法華経**廿**余部／また紫幕十二張を製**り**てみのぶ山に／かか**て由**紺紙金泥の法華経を七面の／山に納むこたび／祖師一代の行状をしるして本化末法の／有縁をちなむその事ハ註画讃よりも／くハしく其画**は**／山海圖にもこえたり／よむにやすくミ

るにあかず人をして／随喜の心を生ぜしむよりて**おもふ**わが／たらちお自得翁いまそかりし時ほくえ／きゃうのミなを唱ふる事をのミまくら／ごととし給ひしがととみに悽愴の／思ひに堪ずいささか鄙俚のことばを／のぶる事しかり

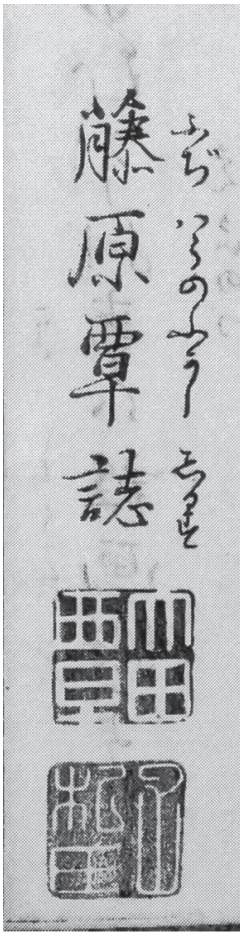
藤原覃誌「印」「印」

この両「序」からわかることは、まずその内容はほぼ同一であること。そして少しく語句に違いはあるものの、注目すべき点として傍線部が指摘できる。『高祖累歳録』の「序」傍線部には、深見要言が「甲斐の身延山にまうづる事あまたたび二十年の間に二十五度となん」とあるのに対して、『本化高祖紀年録』の「序」傍線部は「甲斐の身延山



大妻女子大学図書館蔵「大田南畝印譜幅」（大妻女子大学図書館「大妻女子大学デジタルコレクション」）

大妻女子大学図書館蔵「大田南畝印譜幅」落款拡大



立正大学古書資料館蔵『本化高祖紀年録』「序」落款

にまうづる事あまたたび二十三年の間に三十度となん」と変化していることがわかる。つまり南畝が『高祖累歳録』に「序」を寄せた時には深見要言が「身延山に二十年間で二十五度にわたり詣でた」が、『本化高祖紀年録』「序」の時には、それから三年の月日が流れて身延山詣をさらに五回重ねたことが伺えるのである。しかしこれは南畝が手を加えたものか、それとも深見要言自身か、はたまた他の誰かが手を加えたものか判然としない。いずれにしても先にも述べたが、両書の「序」の大部分に同一性が確認できることから、深見要言が『本化高祖紀年録』を著わすにあたり、南畝に「序」を改めて依頼したかも疑問が残る。他にも『本化高祖紀年録』「序」には注目すべき点がある。それは南畝自署の落款である。『本化高祖紀年録』「序」には落款が二印確認でき、次にそれを大妻女子大学図書館蔵「大田南畝印譜幅」[47]に確認してみた。大妻女子大学図書館蔵「大田南畝印譜幅」は、本幅下記に記されている一文より、南畝が最晩年となる七十五歳の時に、大坂の狂歌師である鶴屋於佐丸（鶴廼屋乎佐丸）に請われて「杏園主人」の号をもって制作したものである。[48]これをもって『本化高祖紀年録』「序」に確認できる二印の落款について考察してみたい。

両序には「藤原覃誌」とあり、写真のように『本化高祖紀年録』には落款も確認できる。上部の落款は「大田覃」とあり、この印については同様のものが「大田南畝印譜幅」にも確認できた。しかし下部の印については「大田南畝印譜幅」に見られず、その詳細が不明である。[49]

次に南畝が『本化高祖紀年録』の挿絵に寄せた詞書[50]について注目してみたい。『本化高祖紀年録』の挿絵に南畝の詞書が確認できるのは、『本化高祖紀年録』第二巻・第三巻・第四巻・第五巻であり、それをみると、

猿圃　猿山一室鎖蒿／莱黒夜飄風放／火来為是仁心／及禽獣慇懃／献／果避塵灰／大田覃[51]

伊東　孤舟遙指伊東／津弟子如雲涙／湿巾安國論成／無一報天涯／空／鼠海南濱／大田覃[52]

小松原　東條大道接天／津日暮松原欲／襲人白刀如霜／矢如雨寧知／刀／杖不加身／大田覃[53]

龍口　浮雲白日暗東／関龍口悲風大／海湾雷電動威／天未厭鴻毛／一／擲重於山／大田覃[54]

塚原　重為遷客隔乾／坤北海陰雲古／冢原絶畠人稀／風雪夜唯餘／阿／佛奉壺飧／大田覃[55]

である。この詞書の詳細をみると、まず「猿圃」では「日蓮聖人四大法難」の松葉谷法難について記されていることが確認できる。日蓮聖人は松葉谷にあった草庵を多くの念仏者に夜襲されるが、その際に白猿の先導でこの難を免れたといい、この霊地を「お猿畠」と称する。次に「伊東」であるが、これは『立正安国論』上呈が為政者や他宗の高僧らの怒りを買い、伊豆国へと流罪となった王難、伊豆法難の場面である。ちょうどこの詞書は、弟子である日朗との「涙の別れ」の部分が詠まれている。さらに「小松原」であるが、これは安房国東条郷松原の大路で地頭・東条景信らに襲撃された場面である。この漢詩は

殉教者を出した小松原法難の様子が克明に詠まれている。日蓮聖人遺文『南条兵衛七郎殿御書』にも「いるやはふるあめのごとし、うつたちはいなづまのごとし」[56]などとあるが、南畝の漢詩の内容はこの遺文と似通っており、南畝の日蓮聖人遺文理解が伺える。四大法難の内容が続くが、この四大法難の最後が「龍口」である。この部分は日蓮聖人斬首時、空が俄に荒れ雷電轟く、あの有名な「光り物」出現の場面が詠まれており、様々な伝記や逸話などで語り継がれるこの状況を南畝は克明に漢詩で表現している。最後が「塚原」で、これは日蓮聖人佐渡流罪中、最初の謫居地である塚原の三昧堂の場面を詠んだものである。流刑地である佐渡での生活は「彼国へ趣者は死は多、生は希なり」[57]と日蓮聖人遺文にあるように過酷を極めた。寒苦と食の欠乏の中、流罪初期の日蓮聖人を支えたのは佐渡で創出された弟子檀越である。この佐渡の檀越の代表格が、本書挿絵にも登場する阿仏房・千日尼夫妻であり、これからも南畝の日蓮聖人伝への理解が伺える内容となっている。

以上、南畝の詞書についてみてきた。先にも触れたが、これらから南畝の日蓮聖人への理解が伺えるわけであるが、南畝はどのようにこのような知識を得ていたのであろうか。当然ではあるが父母から受け継いだものともいえるが、単にそうではなく、先にも指摘したように自らもすすんで知識を得ようとしていた感がある。それは先述の玉沢妙法華寺第三十二世境智院日淳の存在だけでなく、菩提寺の本念寺もその醸成に一役買っていたといえる。その証左こそが南畝の『杏園詩集』中にある「観本念寺蓮祖四厄図」[58]という漢詩の存在である。南畝は大田家の菩提寺である本念寺において「蓮祖四厄図」を拝見し、「観本念寺蓮祖四厄図」を詩作した。本詩は『杏園詩集』第三巻に収録されており、[59]それは、

本念寺観蓮祖四厄図[60]

伊東【豆州】

孤舟遥指伊東津　弟子如雲涙湿巾　安國論成無一報
天涯空竄海南浜

小松原【房州】

東条大道接天津　日暮松原欲襲人　白刃如霜矢如雨
寧知刀杖不加身

龍口【相州】

浮雲白日暗東関　龍口悲風大海湾　雷電動威天未厭
鴻毛一擲重於山

塚原【佐州】

重為遷客隔乾坤　北海陰雲古塚原　絶島人稀風雪夜
唯余阿仏奉壺飧

の四詩である。「蓮祖四厄図」という名から、先の「日蓮聖人四大法難」（松葉谷法難・伊豆法難・小松原法難・龍口法難）が想起されるが、その内容は伊豆法難・小松原法難・龍口法難、そして佐渡流罪となっているのが興味深い。そしてこの四詩について、先の『本化高祖紀年録』に収録される詞書と比較すると、『本化高祖紀年録』に収録さ

れる詞書中、四詩が同じであることが指摘できる。つまり『本化高祖紀年録』に詞書を寄せるにあたり、本念寺に所蔵されていた「蓮祖四厄図」が南畝に影響を与えていたことが理解できるのである。

また、南畝が日蓮聖人遺文をも読んでいたことがわかるものが数点確認できる。ここに一例を記せば、『南畝莠言』巻下の「古の寺社の数」にて、

日蓮上人御書撰時抄に、彼漢土ノ嘉祥等ハ一百余人ヲアツメテ天台大師ヲ聖人ト定タリ。今日本ノ七寺二百余人ハ伝教大師ヲ聖人ト号シタテマツル〈云／々〉。按ずるに、七寺僧徒の数これによりてそのすくなきをみるべし。同書〈録外第七／神国王御書〉漢土の寺は十万八千四十一所也。我朝山寺ハ十七万一千三十七所也。又日本国ノ叡山七寺、東寺、円城寺（ママ）等ノ十七万一千三十七所ノ山々、寺々〈云／々〉。又〈録外第十五／垂迹法問（ママ）御書〉一日本国中社数一万三千三十二所アリ。一仏法住所十七万一千三十七所也。此書をみて其時の寺社の数をしるべし。[61]

とあり、日蓮聖人遺文の『撰時抄』『神国王御書』、また『垂迹問答』（本文には「垂迹法問御書」とあり）の記述より、日本国中のみならず中国の寺社数に関して述べていることがわかる。ここで注目したいのは「録外」の語で、これは日蓮聖人遺文の集成本である『録外御書』を指す。つまり南畝は近世において流布した刊本『録内御書』『録外御書』などをもって日蓮聖人遺文を拝読していたに違いない。さらに、

本念寺読日什記[62]

早登台獄度冬春　中歳還郷在会津　忽読遺書閉仏眼　重将大乗転金輪　羽山脱兎辞緇侶　華洛攀竜謁紫宸　七十高僧成晩器　儼然三寺闘鱗峋[63]

という漢詩があり、これより南畝が「日蓮聖人に関する知識」のみならず、日蓮教団関係事項にも興味を持ち、種々研鑽していたことを指摘できるのである。つまり菩提寺である本念寺もまた南畝の信仰に大きな影響を与えていたといえよう。

五、むすびに

以上「大田南畝と日蓮信仰」と題して、スポットが当りづらい南畝の信仰についてを、大田家の信仰及び、信仰を基に結びついた交友関係、特に深見要言の『高祖累歳録』・『本化高祖紀年録』を手掛かりとして考察してみた。文人として、また幕臣として活躍した南畝の人生は大田家先祖から受け継いだ法華・日蓮信仰をバックボーンとして深い日本仏教理解へと昇華していく。それは様々な南畝作品などに見られることを指摘した。特に家の信仰である法華・日蓮信仰に視点をあてれば、それは南畝の深い教養もあってか、日蓮聖人のみならず広く日蓮教団に関する理解へと醸成されている。それは菩提寺である本念寺の存在のみならず、当時の日蓮系僧侶との多くの邂逅に起因し、その点について今回少しく指摘した。

本稿においては主に「日蓮聖人に関するもの」を中心に考察したが、他にも日蓮教団史に名を残す高僧らに関する多くの漢詩などが南畝作品にみられる。この点については後日をして、さらに考察していきたい。

註

（1）影山堯雄氏は一九六一年に深見要言『高祖累歳録』上・下を折本帙入で翻刻した（日本仏書刊行会）。本書上巻には「高祖累歳録翻刻解説」が付されており、ここで大田南畝の号の一つである「寝惚先生」を「念法華先生」と記している。この「念法華先生」の号は大田南畝の日蓮信仰を現すものと指摘できるが、管見の限り「念法華先生」は影山氏の記述と日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院、一九八一年、一〇二六頁）以外にみられない。

（2）揖斐高編『江戸漢詩選（上）』（岩波書店、二〇二一年）四六一頁

（3）南畝の作品に関しては、浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』全二一巻（岩波書店、一九八八～二〇〇〇年）に依った。また他にも、たばこと塩の博物館編『没後二〇〇年　江戸の知の巨星　大田南畝の世界』（たばこと塩の博物館、二〇二三年）や、小林ふみ子稿「寛政期の大田南畝と狂歌」（『近世文藝』八〇号、日本近世文学会、二〇〇四年）なども参考にした。

（4）大田南畝の出生地や屋敷地に関しては諸説存在する。筆者は浜田義一郎『大田南畝』（人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年）、小池正胤『反骨者　大田南畝と山東京伝』（教育出版株式会社、一九九八年）などに依った。

（5）御徒は将軍の護衛とはいえ「お目見え」もできない下級武士である。よって大田家はさほど裕福ではなく、母・利世はやりくりをしながら大田南畝の学費を工面したようである。玉林晴朗『蜀山人の研究』（東京堂出版、一九九六年）、浜田義一郎『大田南畝』（人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年）、小林ふみ子『大田南畝　江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店、二〇一四年）など参照。

（6）東京都文京区白山・本念寺「信行院妙理日得大姉墓」（大田利世）墓碑銘

（7）恵光寺は、文禄四年（一五九五）に紀州新宮藩主であった水野対馬守の下屋敷地に菩提寺として開創されたと寺伝にある。故に明治時代に入るまでは「武家の寺」として栄え、町人は水野家縁（出入り）の者でなければ葬ることが許されなかったという（拙著『瑞光寺史話』、蓮紹山瑞光寺、二〇一五年、二五頁）。また、妾のお賤は恵光寺よりほど近い浄栄寺にて加療、その後当寺で逝去しており（浜田義一郎『大田南畝』人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年、一五〇頁）、南畝はこの牛込地区の地理には明るかったのかも知れない。

（8）「宝合わせ」に関しては、小林ふみ子『大田南畝　江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店、二〇一四年、三〇～三五頁）に詳しい。

（9）浜田義一郎稿「解説　南畝の狂歌・狂文」（浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』巻一、岩波書店、一九八八年、五二五～五二六頁）。また『大田南畝全集』巻二十「年譜」には、安永三年（一七七四）二月四日に、牛込恵光寺において酒上熟寐（島田左近）が会主となり「宝合会」が開催され、南畝も「玩世音紺紙金泥御詠歌」他二点出品とある（浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』巻二十、岩波書店、一九八八年、八一頁）。

（10）後に南畝は「お香」という妾ももつ。お香の父（島田順蔵）と南畝は旧知の仲であったらしく、お香の姉（美與子）とも南畝が主催するの和文の会で顔なじみであったようだ。このお香について、いつの頃に妾となったかは不明とされる（浜田義一郎『大田南畝』人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年、二一六頁）。

（11）東京都白山本念寺にある「晴雲院妙閑信女」（お賤）墓石右側面には「此婢志津之墓」ともある。

（12）先述したが浄栄寺の近くには日蓮宗の恵光寺（現、瑞光寺）がある。法華信仰を持つ南畝であったが、浄栄寺の住持である雪山は南畝の門人であり、気心知れたこのような関係性より、病床に伏したお賤を浄栄寺に置い

たのであろうと推察される。また毎年祥月命日には、お賤の法号である晴雲妙閑信女より「晴雲妙閑忌」を浄栄寺で営み、これに因む詩歌を作ったという（浜田義一郎『大田南畝』人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年、一五〇頁）。

（13）小林ふみ子稿「寛政期の大田南畝と狂歌」（『近世文藝』八〇号、日本近世文学会、二〇〇四年）二九～三〇頁

（14）南畝が「学問吟味」を受けたのは第二回目にあたる（玉林晴朗『蜀山人の研究』東京堂出版、一九九六年、五一二頁）。

（15）この試験には「遠山の金さん」のモデル・遠山景元の父である遠山金四郎景晋も受験し、景晋は御目見得以上の主席であったという（浜田義一郎『大田南畝』人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年、一五三頁）。

（16）お幸は次女であり、長女は夭逝している（浜田義一郎『大田南畝』人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年、二五七頁）。

（17）浜田義一郎『大田南畝』（人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年）一七一頁

（18）南畝の寛政期における狂歌再開は、小林ふみ子稿「寛政期の大田南畝と狂歌」（『近世文藝』八〇号、日本近世文学会、二〇〇四年）などに詳しい。

（19）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第二十巻（岩波書店、一九九〇年）一九五頁

（20）長崎での南畝の動向について、徳田武稿「大田南畝の長崎体験」（たばこと塩の博物館編『没後二〇〇年　江戸の知の巨星　大田南畝の世界』、たばこと塩の博物館、二〇二三年、一七八～一八一頁）などに詳しい。

（21）南畝の長崎での勤め先は岩原郷立山の東役所で、宿舎もこの岩原郷にあったが、文化二年（一九〇五）に訓令を携えてきた遠山金四郎景晋に宿舎を明け渡して、自らは日蓮宗本蓮寺（現、長崎県長崎市）の塔頭である大乗院へと移った（浜田義一郎『大田南畝』人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年、二〇一頁・浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第二十巻、岩波書店、一九九〇年、二〇七頁）。ここで南畝は以前書写した「自我偈」に跋文を付し一巻に装丁しなおしたものを奉納しているという（浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第二十巻、岩波書店、一九九〇年、二一一頁）。

（22）その一例を記せば「披榛踰嶺踏烟雲　七面山高海色分　一自征韓傳奏捷至今猶奉鬼将軍」という漢詩がある。ここにある「七面山」は現在の日蓮宗七面山妙光寺をいう。妙光寺は元禄九年（一六九六）に、境内地より出土した大石に七面大明神の御神体を刻んで、身延（山梨県南巨摩郡）七面山より免許を得て祭祀したことが濫觴とされており、また肥後（熊本県熊本市）本妙寺より清正公を、中山（千葉県市川市）法華経寺から鬼子母神を勧請し、これらを「三神宮」と称して「七面さん」「妙見さん」「清正公さま」といわれるようになった。漢詩にある「鬼将軍」とは加藤清正を指し、まさしくこれは妙光寺の来歴を踏襲し詠ったものであることは明白である。現在、妙光寺に程近いところに石碑があり、この漢詩が刻まれている（妙光寺来歴については当寺住職・蘭賢隆上人に御教示を賜り、写真などの資料提供も受けた）。

（23）玉林晴朗『蜀山人の研究』（東京堂出版、一九九六年）八五五頁

（24）浜田義一郎『大田南畝』（人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年）二二七～二二八頁

（25）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』巻二十（岩波書店、一九八八年）「年譜」、

（26）浜田義一郎『大田南畝』（人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年）二四三～二四四頁。同内容が玉林晴朗『蜀山人の研究』（東京堂出版、一九九六年、八六四頁）にも記されている。

（27）東京都文京区白山・本念寺「大田南畝之墓」墓

（28）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第九巻（岩波書店、一九八七年）一七八～一七九頁

（29）日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院、一九八一年）一〇二六頁

（30）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第八巻（岩波書店、一九八六年）九七頁

（31）『高祖累歳録』「序」、『本化高祖紀年録』「序」（共に立正大学古書資料館蔵）
（32）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』巻二十（岩波書店、一九八八年）「年譜」、浜田義一郎『大田南畝』（人物叢書、吉川弘文館、二〇一七年）、玉林晴朗『蜀山人の研究』（東京堂出版、一九九六年）など参照。
（33）玉林晴朗『蜀山人の研究』（東京堂出版、一九九六）三二頁
（34）東京都文京区白山・本念寺「大田自得翁之墓」（大田正智）墓碑銘。本墓碑銘には「孝子覃建」とあり本墓は南畝が建立したことがわかる。また墓碑銘は南畝の親友である菊池衡岳の撰にかかるものである（玉林晴朗『蜀山人の研究』、東京堂出版、一九九六、三五・三七頁）。
（35）玉林晴朗『蜀山人の研究』（東京堂出版、一九九六）三三頁
（36）東京都文京区白山・本念寺「大田自得翁之墓」（大田正智）墓
（37）東京都文京区白山・本念寺「信行院妙理日得大姉墓」（大田利世）墓碑銘
（38）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第二巻（岩波書店、一九八六年）二五五頁
（39）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第二巻（岩波書店、一九八六年）二五五頁
（40）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第二巻（岩波書店、一九八六年）一六四頁
（41）玉林晴朗『蜀山人の研究』（東京堂出版、一九九六年、八六四頁）五〇頁
（42）拙稿「深見要言開版『御書五大部』編纂について　特に『立正安国論』校訂を中心に」（小松邦彰先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学の源流と展開』、山喜房佛書林、二〇〇九年）など参照。
（43）影山堯雄翻刻『高祖累歳録』「高祖累歳録翻刻解説」（身延山大学付属図書館蔵）
（44）『大田南畝全集』には、日淳に関する漢詩を管見の限り五首確認することができる（浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第六巻、岩波書店、一九八八年、一四三・一四九・一五四・一五八・一六五頁）。
（45）立正大学古書資料館蔵『高祖累歳録』第一巻四丁裏～六丁裏
（46）立正大学古書資料館蔵『本化高祖紀年録』第一巻二丁表～四丁裏
（47）大妻女子大学図書館蔵「大田南畝印譜幅」（大妻女子大学図書館「大妻女子大学デジタルコレクション」より）
（48）たばこと塩の博物館編『没後二〇〇年　江戸の知の巨星　大田南畝の世界』（たばこと塩の博物館、二〇二三年）二〇八頁
（49）この下部の印は南畝の字である「子耜」とも読めるが、本文でも述べたが「大田南畝印譜幅」にこれを見ることができない。
（50）『高祖累歳録』・『本化高祖紀年録』共に挿絵は確認できるが、その絵について詞書があるのは管見の限り『本化高祖紀年録』のみである。
（51）立正大学古書資料館蔵『本化高祖紀年録』第二巻一〇丁表・天註
（52）立正大学古書資料館蔵『本化高祖紀年録』第三巻五丁裏・詞書
（53）立正大学古書資料館蔵『本化高祖紀年録』第四巻九丁表・詞書
（54）身延山大学附属図書館蔵『本化高祖紀年録』第五巻一七丁表・天註
（55）立正大学古書資料館蔵『本化高祖紀年録』第五巻二八丁裏・天註
（56）立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本　日蓮聖人遺文』一巻（身延山久遠寺、一九八八年）三二六頁
（57）立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本　日蓮聖人遺文』一巻（身延山久遠寺、一九八八年）九五二頁
（58）「蓮祖四厄図」について白山本念寺に確認したが、本念寺は数度にわたり火災などにあっており、本図は現存していないことが確認された。
（59）『杏園詩集』第三巻（『大田南畝全集』六巻、岩波書店、一九八八年）五〇九頁。『杏園詩集』第三巻（続編とも）については『蜀山人全集』には収録されておらず、『大田南畝全集』第六巻にて初めて集成化された。森銑三氏はこの事実を記した上で、本詩について「南畝はついで、その菩提所本念寺において日蓮の四厄の圖を見て、七絶四首を賦した。南畝の父自得翁は、熱心な法華の信者であった。南畝も日蓮の事蹟には通暁してゐたのである」と指摘している（『森銑三著作集』第十巻、中央公論社、一九八九

年、三〇七頁）。

（60）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第六巻（岩波書店、一九八年）八九～九〇頁

（61）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第十巻（岩波書店、一九八六年）四二二～四二三頁

（62）日什は顕本法華宗の開祖で、室町時代に活躍した日蓮教団僧侶である。本詩は日什の法華経弘通の生涯について詠っており、南畝の日什への理解が伺える。これについては本念寺が旧顕本法華宗寺院であることから、本念寺にて日什について学んだのではないかと推察される。

（63）浜田義一郎編集代表『大田南畝全集』第三巻（岩波書店、一九八六年）五一一頁

〈付記〉

本稿執筆にあたり、立正大学古書資料館蔵『高祖累歳録』『本化高祖紀年録』、大妻女子大学図書館蔵「大田南畝印譜幅」、身延山大学附属図書館蔵『本化高祖紀年録』の資料提供・掲載許可、また東京都文京区白山本念寺様より種々の御教示と大田家関係墓所の写真撮影及び掲載許可、長崎県長崎市鳴滝妙光寺様より種々の御教示と資料提供を受けた。ここに立正大学品川図書館及び古書資料館、大妻女子大学図書館、身延山大学附属図書館の諸機関各位、さらに白山本念寺住職　浅井信英上人、鳴滝妙光寺住職　蘭　賢隆上人の学恩に対して深く感謝申し上げる。

併せて、本稿は二〇二三年九月一〇日（日）に東京外国語大学　府中キャンパスにて行われた日本宗教学会第八二回学術大会で筆者が発表した「大田南畝の信仰」の原稿に加筆訂正したものであることを記す。

〈キーワード〉江戸時代、狂歌師、文人、能吏、知識人、武士、深見要言、『高祖累歳録』、『本化高祖紀年録』、日蓮聖人伝